「伝統」への挑戦——Womanist Warrior Walker

風呂本　惇　子

[I]　生殖器切除の「伝統」

フラン・P・ホスケンのリポートによれば、主にアフリカや中東に暮らす女性のうち、1992年現在でなお一億一千万を越える人々が「生殖器切除」を受けているという[1]。男児の「割礼」はイスラムやユダヤ教徒の慣習として広く知られているが、女児のそれは数千年も続けられていながら、おおやけには知られていなかった。部外者に対してそれを口にすることがタブーだったのである。勇気ある人々の努力[2]により、この慣習の実態がかなりはっきりと浮かびあがってきたのは、ようやく1970年代以後のことと言ってよいだろう。切除の様式は地域によっても異なる。エジプトに多いスンナ割礼は、クリトリスの先を除去するものだが、六歳のときにこれを受けさせられた作家ナワル・エル・サダウィーは、「全身を炎で焼かれるような痛み」[3]を記憶している。だとすれば、広範な地域で一般に行われているという、クリトリス全部とその隣接部にまで及ぶ切除の痛みは、どれほどであろうか。さらにスーダンがその代表的地域とされるファラオニック割礼となると、外部生殖器のほとんどをえぐりとり、尿と生理血の排泄孔だけ残して両側を縫い合わせ、封鎖してしまう。縫合にはしばしば植物のトゲを使い、傷が治るまで孔がふさがらないように麦わらや木切れを入れ、両脚を堅く縛っておくという。想像するのも耐え難いこのような切除を、何をされるのかも、それにどんな意味があるのかも知らない少女たちが、ほとんどの場合麻酔もなしに受けるのだ。「割礼」という言葉は、男児の場合の比較的軽度なものを連想させるため、女児の生殖器切除に使うと残酷な真相に

ヴェールをかけることになる。

痛みだけではない。ときに死にいたる出血。消毒が十分でない刃物による細菌感染の恐れ（アフリカにエイズ患者の多いこととの関連が、すでに指摘されている）。排泄機能の低下からくる慢性的な不健康。ぶじに成人してもいずれ直面する結婚と出産の難事。ホスケンが調べたスーダンの「伝統的な出産」では、妊婦がたる木の間にかけたロープを握るか、体をロープでつるされ、助産婦がその下にすわり、妊婦の封鎖部分が開くまで待って、ナイフで切り込みを入れるという[4]。母子の死亡率が高くなるのは言うまでもない。したがってスーダンでは今世紀半ばに、ファラオ式切除・封鎖の禁止令が制定されたのだが、ひそかに切除して不幸な結果になっても隠蔽するのでかえって被害が大きくなり、法律はあってなきがごとしになってしまったという[5]。

法律を無視してまで継承される切除の「伝統」は、どんな意味をもつのだろうか。イスラム圏に特有の慣習であるから、宗教的な理由のためだと考えられがちであるが、イスラム学者たち自身がこれを否定している。たとえば、あとで触れるアリス・ウォーカーの記録映画製作中に、インタヴューを受けたガンビアのあるイスラム学者も、これはイスラムの教えがアフリカに渡る以前からの慣習であること、コーランには義務として記されていないことを述べ、明らかに身体に悪いこの慣習は、はっきり義務として記された断食ですらその時期に身体の具合が悪ければやめるように配慮している本来のイスラム精神に反する、と断言している。彼は、切除が少女の通過儀礼の一環であることに注意を促す。少女たちはその日が近づくと衣服や装飾品など贈り物をもらい、森（bush）へ連れて行かれ、切除を受け、傷の癒えるのを待つ間に 'how to be obedient' を——年配者や男たちに従うことがその社会におけるよき女性になる道であるということを教え込まれるのである[6]。切除・封鎖の本音が女性の抑圧にあることは明白である。それは女性の性欲をおさえこみ、純潔や貞節の証しとする手段なのだ。地域によっては森から出てくる少女たちを祭りのように迎え、広場で太鼓に合わせて踊らせる[7]。女の性を男の管理下に置くための慣

習は、「浄め」と呼ばれ、歌や踊りで祝うべきことに仕立てられているのである。

教育や情報の普及、IAC[8]を筆頭とするさまざまな団体組織の活動のおかげで、切除の比率が減少してきたという報告がある一方、都会や裕福な階級、あるいは欧米へ移住した人々の間で、病院で「手術」をしてもらう傾向が増えたという報告もある[9]。麻酔や消毒で耐えやすくなると言え、切除であることに変わりはない。通過儀礼の一環であった切除が、儀式の行われなくなった状況でも継承されてゆく。切除を受けていない女性は品行方正と見なされず、結婚が望めないからである。男性にとって、「切除を受けていない母親の息子」と呼ばれることは、英語で言う 'son of a bitch' にまさる侮辱だと言う[10]。したがってたとえ欧米に移住していても、同郷の人々との交わりがとだえぬ限り、この価値観は温存される。また、同化より多元をよしとするようになった今日、異文化のなかにあって自分たちのアイデンティティーを求める人々が、独自の価値観を守る必要を感じ、母国の「伝統」を意識的に復活させる傾向も考えられる。さらに、それが 'fashion'[11] になりかけているというおそるべき報告もある。切除の慣習のないコミュニティに暮らす若い娘が、これによって強姦を避けられるとか、妊娠を免れるとかいう誤った「神話」を信じ、親に内緒で病院の医者に手術を頼むのだという。ホスケンはこの慣習を知った1970年代のはじめに、今世紀の終わりまでにはこうした性的暴力を終わらせたいと言っているが[12]、「伝統」の消滅には相当の時間がかかりそうな現状である。

[2] ウォーカーの挑戦

Possessing the Secret of Joy (1992)[13] は、アリス・ウォーカーがこの慣習に真正面から向き合って書き上げた小説である。小説を書き終わるや、彼女は記録映画の製作にとりかかった。その準備段階、調査、撮影旅行(主にガンビアとセネガル)、数々のインタヴューの模様は、映画と同じ *Warrior Marks* (1993)[14] という題名の書物に収められている。監督のプラティブハ・パーマーはケニア

に生まれてイギリスで教育を受けたインド人女性、その他のスタッフもさまざまな国籍の女性たちである。こうした一連の行動を見て、ウォーカーがアメリカの黒人女性として期待されている立場を離れ、異文化に干渉しているような印象をもった人々は少なくなかったようだ。確かにウォーカーは第一作から順を追って、アメリカ黒人女性の置かれてきた苦境と、それにもめげず彼女たちが精神的に成長してきた過程を描きつづけてきた。しかし、第五作 *The Color Purple*（1982）の構成の半分近くは、アフリカに渡ったアメリカ黒人女性が南部に暮らす姉にあてた書簡で成っている。これはウォーカーの視野がグローバルに拡大してゆく兆しであり、果たして次の *The Temple of My Familiar*（1989）で、それは時間的にも（五十万年）空間的にも（北米、中米、アフリカ、ヨーロッパ）一挙に広がった。広がりすぎて作品としての焦点に問題がなかったとは言えないが、当文脈の目的は、彼女のテーマの発展の必然性を言うことにある。ウォーカーはフェミニストとして著名な白人女性のなかに、「女」と言えば中産階級の白人女性しか思い浮かべず、「なじみの体験や、なじみの文化背景をもたないこと」に口を出す勇気も能力もないから、と釈明する人々がいることを知っていた[15]。が、ウォーカーにとって、女性の運動とは地球上のすべての女たちを対象にし、すべての女たちが参加するはずのものである。「フェミニスト」という言葉に代えて、「ウーマニスト」という言葉を用いるようになったのは、そのような広範な運動にかかわろうとする彼女の姿勢の表明であった。狭義の境界を越えて広く深く浸透してゆく力を表現した「フェミニズムがラヴェンダー色ならウーマニズムは紫色」[16] という彼女の言葉は、あまりにも有名である。

ウォーカーは1979年に発表したエッセイ "One Child of One's Own" で、本来のフェミニストなら取り組むべきだとして、世界各地の女にかかわるいくつもの課題を挙げており、その一つに「生殖器切除」も含めている[17]。したがって *Possessing the Secret of Joy* のテーマは、その頃からすでに、いずれ書くべきものとして彼女の脳裏に刻まれていたのだろう。事実、記録映画の監督パー

マーに、「小説そのものは一年で書けたけれど、初めて耳にしてから、それをどのように取り上げればよいかがわかるまで、つまりそれが世界中の人にどういう意味をもっているか理解するまでに、25年かかった」と語っている[18]。「なじみの体験や、なじみの文化背景をもたない」ように見えるこのテーマを、世界中の人にかかわる問題とする意識が熟したとき、小説は生まれるべくして生まれた。"I felt a great deal of rage, a very clear burning forceful anger and rage. . . I felt very angry and yet in creasingly clear in myself, because I believe in the power of the word to change things. I was conscious of twenty-five years of thought, growth, and preparation, and needing to take this on in the best way that I could. But I knew I could undertake this and do it well—and that was a great feeling."[19]

ウォーカーは *Warrior Marks* の冒頭で *Possessing the Secret of Joy* が 'a tool'[20] として役立つだろうとはっきり述べている。芸術は「生」を救うためにある[21]という一貫した観点を堅持する彼女らしい言葉であるが、それはもちろん 'tool' になる小説が芸術でなくてよいという意味ではない。先達の詳細な調査記録や数表を基礎に、それだけでは伝わりきれぬ人間の感情を抽出し、普遍の問題へつなげているからこそ、この小説は ' tool' になり得るのである。

[3] *Possessing the Secret of Joy*

ウォーカーの小説世界に度々登場する架空のアフリカの国オリンカ (Olinka) の娘タシ (Tashi) は、通常の年齢を過ぎても切除を受けていなかったのだが、白人に蹂躙されたこの国にまだ残る「伝統」を守ることを自ら決意し、幼なじみのアメリカ黒人宣教師の娘オリヴィア (Olivia) の必死の懇願をふりきって、民族主義の武装ゲリラが集うムベレ・キャンプ (Mbele Camp) へ向かう。オリヴィアの弟アダム (Adam) は数カ月かけてタシを捜し当て、連れもどし、結婚してアメリカへ伴う。切除を受けたタシに性生活は苦痛でしかなく、難産のあげく嬰児の脳は傷を負う。同じことの起こるのを恐れて次の妊

娠を中絶したタシは、しだいに精神の均衡を崩し、時には暴力をふるい、時には入院し、時には精神分析医を必要とする。このような妻から逃れてアダムが時折安らぎを求めに行くフランス人女性リセット（Lisette）は、タシの苦しみに心を痛め、スイスに住む精神分析医の伯父を紹介する。アダムとタシがムズィー（Mzee、年長の男性への敬称）と呼ぶこの医者によって、タシの心の重石の一つがはずされ、彼女は姉デュラ（Dura）の死因が切除にあった事実を直視する。次にアメリカ黒人女性の分析医レイ（Raye）がもう一つの重石をはずし、タシはオリンカで神のように敬われていた独立運動の指導者が、「伝統」への忠誠を奨励したことを口に出せるようになる。五十歳を過ぎてから、彼女はかつて姉や自分に切除を行った老女マ・リッサ（M'Lissa）が、今や独立したオリンカで無形文化財のような待遇を受けているのを知り、殺意を秘めて数十年ぶりに帰郷する。マ・リッサを殺し、死刑を宣告されるが、アダム、オリヴィア、レイ、脳に傷を負った息子ベニー（Benny）、リセットの遺児でベニーの異母弟にあたる文化人類学者のピエール（Pierre）、マ・リッサの世話係だったがタシには実の娘のように思える若いオリンカ女性のムバティ（Mbati）に囲まれて刑務所で最後の日々を過ごすタシには、精神の平穏が訪れる。この六人は刑場に向かうタシに、'RESISTANCE IS THE SECRET OF JOY!'（P.279）と記した横断幕をかかげて見せる。沿道に並ぶオリンカの若い母親たちも、女の赤ん坊のおしめをはずしながらタシを見送る。銃を構えて威嚇する男たちにはわからないが、それはタシのメッセージを受けとめた彼女たちの 'protest and celebration'（p.278）の行為である。

このような話の筋は、クロノロジカルには語られない。語り手は登場人物の間で転々と交代し、その度に異なる視点の、異なる時期の回想が紡ぎだされ、徐々にタシが殺人罪で法廷に立たされていることが読者にわかってくる。最も頻繁に語るのはもちろんタシなのだが、その精神の揺れの激しさを示すかのように、彼女はタシとして語る場合も、アメリカ名のイヴリン（Evelyn）として語る場合も、その両方が重なる場合（タシ–イヴリン、あるいはイヴリン–タシ）

もある。死刑前夜はタシ-イヴリン-ミセス・ジョンソン（Johnson はアダムの姓）として語り、死後の魂の語りもタシ-イヴリン-ミセス・ジョンソンのそれであることは、分裂がちだった彼女の精神に平穏が訪れ、自己の内部でアイデンティティーが確立していることを示していよう。タシは夢想癖があり、緊張した法廷の場でもしばしば別の世界へ魂を浮遊させてしまう。それが無意識の現実逃避であることをタシも悟っているふしがある。'. . .if I find myself way off into an improbable tale, imagining it or telling it, then I can guess something horrible has happened to me and that I can't bear to think about it.'（p.130）彼女の夢想も含む登場人物たちの断片的な語りの集大成が、国家の権力を代表する法廷の裁きによって無視された個人の魂の遍歴を復元する。このような構造を通して、周囲の人々がタシの苦難にそれぞれの形でかかわり、（殺されるマ・リッサも含めて）自分を変えてゆく様子が見えてくる。

その一方、作者は一見特異なこの物語をおそらくは読者自身にもかかわるものにしようという意図をもって、普遍につながるさまざまな糸を織り込んでいる。その糸のいくつかに焦点を当ててみよう。たとえばタシが切除を受ける前と後との比較である。オリヴィアをふりきって出かけるタシは、友人どうしが永遠に別れるときに鳴くと言い伝えられている鳥 'Ochoma' の声を聞く（p. 21）。物理的にはタシはアダムとオリヴィアのもとへ戻ってくるが、鳥の予言はある意味で当たっている。なぜならこのとき以来、元のタシは永遠に失われるのである。アダムの記憶にあるタシは、目覚めたばかりの愛の喜びを全身にみなぎらせていた。'Whenever we held each other she was breathless in anticipation. Once, she claimed her heart nearly stopped. Such pleasure as ours was difficult for us to believe. Was it a pleasure of which others know? we often asked ourselves.'（p.32） ところが切除を受けたあとのタシの目は、彼にとって 'as flat as eyes that have been painted in, and with dull paint'（p.44）に見える。タシ自身の記憶もこれを証している。'My eyes see him but they do not register his being. . . .It is as if my self is hiding behind

an iron door.' (p.45)　したがってタシの精神の亀裂は、このときすでに兆している。'classic Olinka woman's walk' (p.65) とオリヴィアが形容するすり足で歩くことを余儀なくされ、排尿に15分もかかる肉体的拘束感が彼女をすっかり 'passive' (p.65) にしてしまう。肉体の拘束が精神の抑圧につながるさまがありありと見え、ここで多くの読者は連想することだろう。中国にあった纏足。アラブの女たちが被るチャドルやヘジャーブ。昔の日本の女性の身体に巻き付いた分厚い重い帯。西洋の女性をしめつけてきたコルセット。(現代のかかとの細いハイヒールとタイトスカートまで思い浮かべる者もいるかもしれない。)

タシを毎晩のように苦しめた悪夢は、この拘束感に由来すると思われる。夢の中で彼女は井戸のように湿って冷たく暗い塔のようなものの中にいる。赤ん坊の爪が紙をひっかくようなかすかな音がたえず聞こえ、無数の何かが自分の回りでうごめいているが、暗くて見えないし、自分の羽はもぎとられている。それに、'. . .they're forcing something in one end of me, and from the other they are busy pulling something out. . . .And I can not move !' (p.27)　幼いころから母のリセットを通してタシの悪夢を聞いていたピエールは、文化人類学の研究をしているうちにその意味に思い当たり、死刑を前にしたタシに解いてみせる。彼は原初のアフリカ人たちが涼しさ、快適さ、持続性、簡単さの点でシロアリの巣をまねて住処を作ったという説[22]から始めて、タシの夢に出てくる暗い塔の正体がシロアリの巣であることを指摘する。'This, Madame Johnson, is your dark tower. You are the queen who loses her wings. It is you lying in the dark with millions of worker termites. . .buzzing about. You being stuffed with food at one end—and having your eggs, millions of them, constantly removed at the other.' (p.227) つまりタシの悪夢は自分の身体がただ子孫が通過してゆくための 'a tube' にされる恐怖に根づいたものだった。ここで、シロアリより身近な蜂の世界を思い起こし、女王蜂はむしろ子生みの道具にされた奴隷蜂という視点に立ってみる読者もあるだろう。そこから、跡継ぎの子を生んだ後、用済みのごとく婚家から出されることもあった

そう遠くない過去の日本の女たちのことを連想してもおかしくない。あるいは、体外受精や代理母出産に連想の糸をつなげる者がいても当然である。

タシの怒りは女の性を子孫の繁殖のために管理された怒りである。切除を受ける前の情熱的なタシを思い起こせば、法廷で裁判官や傍聴人よりむしろ家族に向かって "Can you bear to know what I have lost?" (p.35) と叫ぶことに納得がゆく。女の身体に備わる本来の喜びに目覚め始めていたタシは、その喜びを永遠に奪われてただの 'tube' にされた苦しみを人一倍感じていたはずである。だが、オリヴィアもアダムも、脳に傷を負ったベニーはなおさら、タシの苦しみを本当には理解していなかった。牧師の夫アダムが教会でいつもキリストの受難の話ばかりすることに、タシはいらだった。'I am a great lover of Jesus, and always have been. Still, I began to see how the constant focus on the suffering of Jesus alone excludes the suffering of others from one's view.' (p.273) そして一度でよいから女や子供の苦しみを説教のなかで語ってくれないか、と懇願するが、アダムはそんなプライベートなことを話したら会衆が 'embarrassed' であろうし、自分も 'ashamed' だからと、とりあわなかった。オリヴィアはオリヴィアで、タシが罪を犯すはずがないと思い込んでいる。タシにしてみれば、人柄を信用してもらうより、苦悩のあげく殺さなければいられなかった事実をしっかり見てほしかったにちがいない。善意に満ち、だれよりもタシのことを気づかっていながら、彼女の心の叫びを聴いてこなかったこの姉弟を配することによって、作者は異文化圏の慣習を理解することのむずかしさを暗示する。

タシとオリヴィアの心理的なすれ違いは、タシが切除を受けに出かける場面にすでに現れていた。タシはロバにまたがり、上半身は裸で、ライフル代わりに槍を持っている。いかにも時代錯誤のそのいでたちが、本人の心の中では威風堂々たるものになっていた。'I had in my mind some outlandish, outsized image of myself. I sat astride the donkey in the pose of a chief, a warrior.' (pp.21–22) タシが抱く民族主義への過大な幻想が見てとれるが、彼女は自身を

その幻想に置くことで、これまでオリヴィアに言えなかったことを吐き出せる——宣教師は白人の 'wedge' (p.22) として使われているとオリンカの人々が見なしていることを。オリヴィアは泣きながら必死でタシの決心を変えようとしているが、そのオリヴィアが一度も、髪形ひとつすら、オリンカふうにしなかったことをタシは知っている。変わらせられるのはいつもオリンカ人の方だった、と。自分の文化圏の価値観から離れないために、その善意を「おせっかい」だと見なされてしまう傾向は、異文化圏に働きかけるあらゆる運動が陥りやすい弱点である。一方、ウォーカーはこうした弱点を克服する願いをこめて、タシの後半生に精神分析医レイを登場させる。レイは切除の痛みを感じてみるために、歯茎を切開し、病巣をえぐりとって縫合してもらう。'In America it's the best I can do. Besides, it gives me a faint idea.' (p.131) 痛みの一端を共有して理解しようとしたレイに、タシは心を開く。

もっとも、タシの出発場面における作者の一番の強調点は民族意識の魔力にある。オリンカの独立運動の指導者は、ケニヤッタやマンデラと違って長い拘禁から釈放された後暗殺されたため、自分たちに代わり犠牲になった人として彼に対する国民の敬愛は永久化した。その名を口にすることが禁じられていたので、彼は 'Our Leader' とのみ呼ばれるが、アダムは人々がこの言葉を口にするときの様子はまるで 'Our Lord' (p.122) を語るかのようであることに気づいていた。レイにはげまされて過去を探るタシは、彼のメッセージに、'the purity of our own culture and tradition', 'our ancient customs' (p.115) の強調があり、女が 'unclean part' (p.119) を切って身体を浄めることが奨励されていたのを思い出す。少女のタシには神の言葉のように聞こえたことであろう。この指導者は「オリンカの男なら割礼を受けていない女と結婚することなど考えないだろう」(p.120) と言った。ここで当然、「ケニヤの男は割礼を受けていない女とは結婚しない」と言ったケニヤッタが連想される[23]。

ケニアでは、白人の間からこの慣習に反対の声が出たとき、その声が新たな植民地主義策略の一つと見なされ、いっそう慣習が強化された[24]。「解放者」ケ

ニヤッタがそれを支持したのである。この慣習に反対する活動家 Efua Dorkenoo は、'Because Kenyatta was a politician, he realized this tradition was a key issue he could use as a political tool, to mobilize the people against the colonialists'[25] と語る。そしてこの種のやり方が今も衰えていないことを指摘する。「伝統」は民族意識の高揚に最適なのである。タシは「伝統」に回帰すれば独立運動に献身できるような錯覚を抱いていたが、実際にはキャンプで切除を受けた後の彼女は、自由に動くこともできず、すわって民芸品のござを編むしかない。1995年に来日したサダウィーは、「反帝国主義のシンボル」としてヴェールをまとうことを自分の意志で選んだと言うアラブの女性たちも、「洗脳」されていると見なす。「どうやってヴェールで覆われることによって帝国主義や植民地主義と闘うことができるというのでしょう。私は自分の眼を閉ざすのではなく、知ることによって、自分の眼を開くことによって植民地主義と闘います」と、彼女は言う[26]。

オリンカの終身大統領はタシの死刑に熱心であり、減刑請願に行った女たちは追い返される。明らかにタシの行為は、民族意識で外圧に対抗する体制を揺るがすものと見られている。前述の Dorkenoo は、生殖器切除の慣習に反対するキャンペーンの一環としてドラマを作ったとき、弾圧を恐れ、切除する箇所を「片脚」に置き換えたという。サダウィーの受けた数々の弾圧（公職追放、書物の発禁、危険人物としての拘禁）も、彼女の行動が反体制と見なされたからである。切除が子供や女性に害を与えると判明していながら、体制の結束のためにその事実を無視し、事実を訴える声は違反分子として抑圧する。これは世界のいたるところに見られる現象であり、ウォーカー自身もアメリカの黒人の運動の中で体験した。人種差別撤廃という緊急の目標のためには、黒人コミュニティ内部の性差別に対する抗議は身内への裏切りであるかのような扱いを受けてきたのである。

体制を揺るがす者への罰は、家庭レベルでも同様である。小説には、性生活の恐怖に耐えられずに逃げ出して入水自殺をした新妻の両親も夫も、彼女を管

理できなかった咎で村を追放されるエピソードが描かれている。実在のマリ出身のある女性は、自分が切除を拒否して国を出た後、母親が家を追い出されたと語っている[27]。切除、結婚、出産という苛酷な定めを生き延びた母親が、苦しみを知っていながら幼いわが娘に同じ道をとらせる理由のひとつはこの辺にあるのだろう。タシの村では前任の白人宣教師がこの慣習にブレーキをかけていたのだが、後任の宣教師（オリヴィア姉弟の父）が黒人だと聞くなり、タシの母は慣習が戻ると思い込んだ。母親なら、ちょっとした傷でも出血のとまりにくいデュラの体質を知っていたはずなのに、彼女は「伝統」からはずれることの方を恐れたのだ。マ・リッサはその母親を批判する。'I told her to wait. But no. She was the kind of woman who jumps even before the man says boo. Your mother helped me hold your sister down.'（p.253）おそらくデュラの死が教訓となって、タシはその年齢になっても切除を免れていたのだろう。娘を失った悲しみに耐えながら、重い作物を背負って坂道をのぼる母親のあとを追うタシの動作は、極めて象徴的である。'As she staggered under her load, I half expected her footprints, into which I was careful to step, to stain my own feet with tears and blood.' (pp.16–17)

娘が母の人生の足跡をなぞる。あるいは母が娘の人生を規定する。母と娘のドラマはいたるところに見い出される。レイの患者（自殺した）の母親で、ニューオーリーンズの裕福な白人家庭の出身であるエイミー・マクスウェル（Amy Maxwell）は、子供のとき性器に触るくせがあり、それを嫌った母親が切除を受けさせた。[なお、この話を契機に、かつて女奴隷の身体から切除と封鎖の方法を知ったアメリカの医者たちが、'a cure for the white woman's hysteria'（p.186）として応用を考えたことが紹介される[28]。宗教も通過儀式も伝統も無関係な状況であるから、目的にヴェールのかけようもないわけだ。] 母親の 'invisible hand'（p.187）により一生コントロールされることになったエイミーは、息子に代わりの人生を期待し、彼を追いつめてしまうのである。他方、マ・リッサの母親はウォーカーが「ツンガ（tsunga）」と名付けた世襲の切

除役を担っているものの、感受性に富む彼女にはこの仕事が 'torture' (p.214) であった。彼女が我が娘の切除に手加減したのを見とがめた人々の手でマ・リッサはかえって大きくえぐられ、一生片脚をひきずるようになった。「あのとき以来自分には会っていない。三カ月後にやっと儀式小屋から帰ってきたのは元の自分ではなかった」と語るマ・リッサであったが、タシの殺意を承知のうえで彼女の世話を受けているうちに、「儀式小屋で血を流して泣いている女の子」をついに心に呼びもどす。'She is still crying. She's been crying since I left. No wonder I haven't been able to. She has been crying all our tears.' (p.218) 彼女は「伝統」に忠実につくすことで国に貢献したとして表彰された自分たちが、'torturers of children' (p. 219) に過ぎないのではないか、とつぶやく。マ・リッサとはマザー・リッサの意味だ。子供を拷問する役の自分が「マザー」と呼ばれ、結局社会を支配する人々に利用されていた皮肉に、彼女自身は気づいたのであろう。このような心しずむ母娘のテーマに、作者は希望につながる要素も送り込むことを忘れていない。横断幕をかかげてタシを見送るグループのなかで、圏内からのただ一人のメンバーであるムバティは、タシを初めて見たときから 'motherly' (p.157) と感じた。ムバティは実母を亡くしているが、死因をたずねるのは (デュラの場合と同じく) タブーだとされている。それにムバティもすり足で歩くことを余儀なくされている。悲しみと苦しみの源をタシと共有するムバティが、タシの抗議を継承することでタシの精神的な娘になってゆくことが暗示される。

最後に、「社会は変えられる」という、これまでの作品にも一貫して流れていたウォーカーの確信について触れておこう。自我の確立しはじめた十代のときに、公民権運動によって日に日に変わってゆく社会を目撃してきた彼女である[29]。その確信は数千年続いた根強い「伝統」に向かってさえ、くじけない。彼女はその確信をこの作品でも表現している。社会を変えるのは人間である。だからまず人間が変わらなければならない。そして人間は変わり得る。ウォーカーはそれを語り手の一人一人で示すのだが、最もはっきりと変化の見えるの

はアダムである。たとえば、オリンカに到着した最初の日、姉を失ったのだが泣くことを禁じられたため声を出さずに滝のような涙を流している小さなタシに、オリヴィアは気づいているがアダムはまったく気づかなかった。彼の記憶にあるタシはいつも快活で敏捷だった。結婚してアメリカに渡ってから、タシの苦しみをずっと見ていながら、それをタシに固有のものとしてしか彼は受けとめていなかった。'It had never occurred to me to think of Tashi's suffering as being on a continuum of pain. I had thought of what was done to her as something singular, absolute.' (p.165) だから教会の説教の話題になどしようとも思わなかった。けれどもタシの裁判で法廷にいる間に、彼はその場にいる女たちの一人一人が、だれにもなぜ泣くのか聞いてもらえぬまま泣いている子供のように思えてくる。刑務所のなかには、行き場のない瀕死のエイズ患者たちが収容されており、オリヴィアもアダムも裁判の合間に彼らの世話をしている。ある日、アダムは患者の一人から「神父さん」と呼ばれ、彼の告白を聞くはめになる。エイズ・ワクチンをつくる白人の研究所で仕事をしてきたこの青年は、チンパンジーや猿を次々につかまえ、せまい檻で繁殖させ、頭をはね、内臓をくりぬく作業に従事してきたという。心の目にむごたらしい光景が浮かび、アダムは思わずうめいてしまう。'I groaned in agony, almost exactly as he had done. The sound of my own sorrow was shocking to me. But, surprisingly, my sorrow made Hertford look, finally, released.' (p.262) 青年ハートフォードは彼自身の（つまり人間の）存在の恐ろしさを、まだ感じることのできるだれかに伝えたという安堵感をもって死んでゆく。アダムは傷ついた者たちの痛みをわがこととして分かちあえるようになっている。妻の狂気、殺人、死刑という苛酷な体験を初老の身体に刻みこまれたアダムであるが、彼の変化を描くことで、作者はそのような個人個人のいわば 'warrior marks'[30] を、犠牲者の印ではなく、前進のためのエネルギーにすることが可能であると言いたかったのであろう。

注

1) フラン・P・ホスケン『女子割礼』(鳥居千代香　訳) 明石書店、1993年。p.94.
2) アリス・ウォーカーは Fran P. Hosken の他に Esther Ogunmodede, Nawal El Sadawi, Lila Said, Robin Morgan, Awa Thiam, Gloria Steinem, Fatima Abdul Mohmoud などの名を挙げている。Alice Walker, *Possessing the Secret of Joy.* Harcourt Brace Jovanovich, New York. 1992. p.285.
3) ナワル・エル・サダウィー『イヴの隠れた顔』(村上真弓　訳) 未来社、1988年。pp. 38–39.
4) ホスケン、p.136.
5) *Ibid.,* p.106.
6) Alice Walker and Pratibha Parmer, *Warrior Marks.* Jonathan Cape, London. 1993. pp.325–326. ガンビアのイスラム学者 Baba Lee との対談より。あるいは p.311 の、切除を受けてまもない少女へのインタヴューもこれを証している。
7) *Ibid.,* pp.105–108, pp.172–177.
8) Inter–African Committee on Traditional Practices Affecting the Health of Women and Children (1984年に結成)。またセネガルには1982年に注 (2) に名前の挙がっているアワ・ティアムの努力で女たちだけの Commission for the Abolition of Sexual Mutilation が組織された。*Warrior Marks,* p.141.
9) ホスケン、p.56.
10) *Possessing the Secret of Joy,* p.275.
11) *Warrior Marks,* p.340.
12) ホスケン、p.20.
13) テキストは注 (2) のもの。以後の引用は頁のみ記す。なお、筆者は『女子教育もんだい』58号、『世界文学』78号においてすでにこの小説の紹介をしている。
14) 記録映画の方も1993年に公開されている。
15) Alice Walker, *In Search of Our Mothers' Gardens.* The Women's Press, London. 1984 (1983). p.372.
16) *Ibid.,* p.xii.
17) *Ibid.,* p.379.
18) *Warrior Marks,* p.269.
19) *Ibid.,*pp.269–270.
20) *Ibid.,*p.9.
21) Alice Walker, (詩) "Songless", *Horses Make a Landscape Look More Beautiful,* The Women's Press, London. 1985 (1984). p. 28. "What is the point of being

artists if we cannot save our life?"

22) ウォーカーが引用している学説は Marcel Griaule, *Conversation with Ogotemmêli: An Introduction to Dogon Religious Ideas* (1965) から。

23) *Warrior Marks,* p.268.

24) *Ibid.*, p.248. なお、ケニアでは1982年にモイ大統領が禁止令を出したが、地域や階層によってはいまだに続けられているという。

25) *Ibid.*

26)「日本とアラブ・イスラームの女たち」、サダウィーと大林道子の対談より。『グリオ』vol.10. 平凡社、1995年10月。p.7. なお、サダウィーは西欧の女性の化粧をポストモダン的ヴェールと呼ぶ。また肌を露にすることとヴェールは同じコインの裏表であるとし、どちらも女性が単なる肉体、あるいは性的対象であることを意味すると主張している。

27) *Warrior Marks,* p.259.

28) ウォーカーの典拠は、G.J.Barker-Benfield,*The Horrors of the Half Known Life: Male Attitudes Toward Women and Sexuality in Nineteenth Century America* (Harper & Row, New York. 1976).

29) *In Search of Our Mothers' Gardens,* p.252. "I believe in change: change personal, and change in society. I have experienced a revolution (unfinished, without question, but one whose new order is everywhere on view) in the South."

30) "What the woman warrior learns. . .is that you can fight back, even after you are injured. Your wound itself can be your guide." *Warrior Marks,* p.18. これは切除の肉体的精神的傷を負った女性に向けられた言葉ではあるが、より広義に受け取ることができる。ウォーカー自身は少女の頃、兄に玩具の銃で目を撃たれ、片目を失明したが、苦闘の末にそれを 'the mark of a victim' ではなしに 'a warrior mark' に変えることができたと感じている。またウォーカーは *Possessing the Secret of Joy* と *Warrior Marks* をともに Mbele Aché (Forward energy を意味するスワヒリ語とヨルバ語の混成) という言葉でとじている。なお、この小説の印税の一部は、切除の影響を知らしめる教育資金に充てるということである。

Summary

A Challenge to a "Tradition" :Womanist Warrior Walker

Atsuko Furomoto

The Hosken Report states that as of 1992 more than 110 million women and girls living in Africa and the Middle East have been genitally mutilated. Female genital mutilation varies in type from Sunna which means removal of the tip of the clitoris to Pharaonic which means a thorough scraping away of the entire genital area. In the latter case, the remaining sides are stitched together, often with thorns. It is obvious that countless lives have been lost due to such an atrocious custom. Nevertheless, within the societies where this is practiced, those who do not undergo any such mutilation are looked on as unclean or wanton women. There is no religious grounds for this custom; Islamic scholars confirm that it is not stated as an obligation in the *Koran*. Who can deny then that it is simply a means of keeping women under the control of men? And this "tradition" has been practiced "over maybe six thousand years", according to Alice Walker.

Alice Walker is a "womanist" who naturally thinks of women all over the world whenever she hears of "the women's movement". Consequently, she can not avert her eyes even from such a seemingly strange custom. She confronts this taboo subject in her novel *Possessing the Secret of Joy* and also in the documentary film *Warrior Marks* which she made together with a group of women. In both the novel and the documentary she tries to see this not as a brutality peculiar to a certain region but as something which happens in many countries in different guises. Her view that this

is related to the entire people on the earth is persuasively expressed through both the form and the content of the novel ; and her faith in human potential to change society, through the delineation of characters in the novel.